

REC

TECHNICAL REPORT No.0008

I S S N 0918-2861

RECT-SS360

REC まちづくり研究助成研究報告書

原木流送仕事唄の調査と新しい継承
について

— まちづくりグループ〈穂別町民劇場〉の活動 —

A Study of a Song for Sending Drift
Timbers Down to Towns and its New
Succession to Community People

Report on Community Making Activities by the Hobetu Townspeople

(解説)

森 雅人

noted by

Masato MORI

Feb. 1994

静 修 学 園

北海道環境文化研究センター

HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE

はじめに

この報告書は当研究センターのまちづくり研究助成により、道内まちづくりグループの人たちが行った研究活動の成果をまとめたものです。本稿『原木流送仕事唄の調査と新しい継承について』は、北海道勇払郡穂別町のまちおこしグループ〈ほべつ町民劇場〉が、独自の調査により明らかにした仕事唄を収録したものです。冒頭に掲載した「解説」は、当研究センターの森主任研究員に担当してもらいました。

当研究センターは旧・静修短期大学北海道生活研究所を改組し、北海道環境文化研究センターとして再出発しました。学校法人静修学園は平成5年度に、4年制の静修女子大学（人文・社会学部）を開学させましたが、研究センターの活動は学園の新大学設置と連動して、平成4年度から実質的にスタートしたわけです。

当研究センターは、大学と短期大学の研究機能の集結点であるだけでなく、〈道民に開かれた交流ネットワークの拠点をめざして〉というスローガンのもとで、新しい試みを開始しています。その1つが道内まちづくりグループの研究活動への助成事業です。平成4年度は数多くの応募の中から「ほべつ町民劇場」のほかに、「北の星座共和国」の『双子座館の利用促進のための商品開発』が助成対象に選ばれました。後者については、本報告書に平行して出版されます。

研究活動は研究者や大学の教員という専門職者だけが担うものではなく、まちづくりグループのように水準の高い民間人にも、研究の機会が与えられるべきです。もし在野で研究の契機を求めているばあいは、それを支援するのも大学の役割といえます。当研究センターではほかに、研究自由人（留学研究員）の制度や移動大学講座、オープン・カレッジ等があり、大学と地域社会を結ぶ最大限の可能性を追い求めています。

この報告書がまちづくりグループ、行政担当者、研究者などのあいだで広く活用されることを願っています。

北海道環境文化研究センター所長

大 山 信 義

【解 説】

北海道勇払郡穂別町のまちおこしグループ〈ほべつ町民劇場〉 『原木流送仕事唄の調査と新しい継承について』

森 雅人

はじめに

本研究は、静修学園北海道環境文化研究センターが公募した「平成4年度まちづくり研究助成」による研究成果の1部である。助成の対象となったのは、北海道胆振管内勇払郡穂別のまちづくりグループ「ほべつ町民劇場」（中澤由幸代表、会員60人）による『原木流送仕事唄の調査と新しい継承について』である。これまで、同劇場は「読む」・「書く」・「観る」をキーワードとして、町民に共通の価値を追求したり、その目的を達成するために活動してきた。本研究の目的は、原木流送仕事唄の採譜作業をとおして、穂別町で一時代を築いた原木流送に対する住民の歴史認識を深めるとともに、研究成果である「土場唄」を、新たな地域づくりのテーマソングとして、毎年催される全町レベルのイベント「穂別流送まつり」のなかで継承することにある。本研究の成果は、住民参加によるイベント型のまちづくりを進めている市町村にとって重要な示唆を与えている。

以下、本研究の主体となったほべつ町民劇場の活動を中心に、若干の解説を加えていきたい。

1. ほべつ町民劇場発足の背景

穂別町は農業と林業を基幹産業とする人口4,458人（平成2年）の町である。昭和30年代前半までは、炭鉱と石油の露天掘りの町としても栄え、人口も15,000人を数えた。戦前から戦後にかけては、文化活動が活発に行われ、穂別中央館では毎日のように映画が上映されたほか、旅まわりの役者たちによる人情劇も演じられた。

しかし、娯楽の変化や過疎化により、穂別中央館での映画上映は激減し、昭和47(1972)年には閉鎖された。穂別中央館が閉鎖されてからも、町内の若者が中心となって映画の野外上演や演劇鑑賞会などを催してきたが、その活動は居住地区や所属する職場毎に個別化していた。そのことが、イベントの継続性を確保する上で問題となっていた。

そのような状況の中で、昭和56(1981)年秋、全道各地で演劇活動を展開していた「劇団・ふるさとキャラバン」（本部・東京都小金井市）が穂別町を訪れた。ふるさとキャラバンは、地域・ふるさとの現在をミュージカルで表現する劇場で、この時は全国各地で「兄ちゃん」を巡回公演中であった。ふるさとキャラバンの手法は、公演を予定する市町村の役場・農協などを訪ねて、演劇の好きな人を探し歩き、実行委員会を組織させた上で、上演のための準備を担当させるというものであった。

これを機に若者の「たまり場」をつくろうと、「穂別町カラマツ青年隊」をはじめ町内の若者が幾度か会合をもった。その中で記藤文秀さん（農業）が実行委員長の名乗りをあげたのが翌57(1982)年2月である。

赤字が出たら自分が引き受けるという実行委員長の意欲に感動した若者が実行委員となり、券売、当日の舞台や観客席の設営、音響、受付、団員の昼食・夕食などの準備を行った。こうした活動は7年間にわたって続いたが、回を重ねるにつれ、以下のような問題が出てきた。

- (1) 開演の2ヶ月前から、本業の終わった後で券を売り、看板を書くといった準備で、毎夜帰宅が10時を過ぎた。頑張った人ほど翌年は顔が見えなくなっていた。
- (2) 人口の少ない穂別で2,000円以上の券を売るということは、義理で引き受けてもらうことになる。引き受けてもらった実行委員は、何らかの形で義理をかえしていかなければならない。
- (3) 回を重ねるにつれ、発券数に対する観客数が減ってきた。演劇を見たいというより、若い人たちへの寄付のつもりで券を買う人が多くなってきた。

券売活動のように、実行委員個人に重くのしかかる負担を軽減し、町の方々に寄付のような思いで券を買っていただくようなことをなくするために、平成元(1989)年、中沢由幸さん(農業)を代表とする「ほべつ町民劇場をつくろう会」が発足した。第1回設立キャンペーンとして、ふるさとキャラバンを招き、同年11月22日にミュージカル「ムラは3・3・7拍子」を上演。平成2(1990)年4月のほべつ町民劇場の正式発足に向けて、組織基盤を固め、基金を設けるための準備を着手した。

2. ほべつ町民劇場

ほべつ町民劇場には代表、事務局(3名)が置かれ、次のような活動方針に基いて運営されている。

- (1) この会は地域の「読む」「書く」「観る」文化を中心として活動する。演劇やコンサートの開催、講演会や映画などの他、地域文化団体の発表会や展示会などを、そのジャンルをこえて、地域の生産活動としての新しい試みを行う。
- (2) 会員制、会費による運営とする。継続維持と新しい展開を試みるため、理解ある協賛をつくる。
- (3) 会員は穂別の人に限らない。穂別の森と空と町を愛する人たちによって構成する。

当劇場には会費などの義務、加入脱退の規制を明記した会則はないが、上記の活動方針の他に概ね次のようなことを申し合わせている。

- (1) 文化団体として補助金の受け皿になる。
- (2) 各イベントの損益を調整する。
- (3) 作業の合理化を図る。
- (4) 実行体制を個人から団体代表制へ移行する。

当劇場は、発足以来、流送まつりをはじめとするイベントの主力メンバーとして活動している。これまで当劇場が主催・協力してきた事業を、主なものについて「読む」「書く」「観る」の文化創造に沿って整理すれば以下のようなようになりう。

□読む

まちづくり会議や国際会議などを開催・人材派遣することで、町民に情報を提供する場を設ける。

平成2(1990)年 第9回世界ホラふき大会(1993)

平成2(1990)年 第6回北海道ミニ独立国連邦サミット(1993)

- 平成 3 (1991)年 国際水辺環境フォーラム穂別ステージ
- 平成 3 (1991)年 冬のキャンプ場を楽しむ集い (1993)
- 平成 4 (1992)年 地球体験コンサート (1993)
- 平成 5 (1993)年 景観を考えるフォーラム
- 平成 5 (1993)年 車イスキャンプと体験農園の集い
- 平成 5 (1993)年 廃校の登校日
- 平成 5 (1993)年 障害者にやさしい北海道観光をめざして
- 平成 5 (1993)年 地域づくり活動グループとの対話

□書く

当劇場が関与した活動を調査・記録し、町民の財産として役立てる。

- 平成 4 (1992)年 原木流送仕事唄の調査と新しい継承について (1993完)
- 平成 4 (1992)年 サラウアの帽子賞 (まちづくり表彰) 設立
- 平成 5 (1993)年 長見義三作品集の発刊・頒分・記念碑建立
- 平成 5 (1993)年 サマータイム・フォール・イン・ラブ (ほべつ町民劇場のイメージソング) 制作
- 平成 5 (1993)年 Cropほべつ町民劇場 (ほべつ町民劇場の足跡) 刊行

□観る

演劇・楽団を招き、町民に本物との触れ合いの場を提供する。

- 平成 2 (1990)年 こどものためのコンサート・札幌とともに
- 平成 2 (1990)年 倉橋ルイ子ステージトラックライブコンサート
- 平成 2 (1990)年 風は故郷へ (統一劇場公演)
- 平成 4 (1992)年 詩と音楽の夕べ
- 平成 4 (1992)年 サハリン州立人形劇場公演
- 平成 5 (1993)年 ザイラー・ピアノデュオによる廃校コンサート

設立から今日までの当劇場の事業は、必ずしも主催者という立場で行われてはいない。また、文化団体であるといっても、趣味で行うサークル活動のように、個人の満足を追求するための団体ではない。町民に共通の価値を追求したり、その目的を達成するための活動体である。

本研究の進めるきっかけとなったのも、原木流送仕事唄のように金に代えることのできない町民共通の財産が、関係者の高齢化や他界によって損失の危機に直面しているという認識があったからである。当劇場では、こうした財産を守り、文化活動を新たな地域産業として育てていくことを構想している。

3. 今後の活動

今後、ほべつ町民劇場では、本物と接する機会を町民に提供すること、町民の才能を引き出す機会を提供すること、町外の人々との交流を促進することの3つを柱として活動する予定である。こうした活

動は、これまでもイベントなどの開催を通してある程度実践されてきたものであり、個々バラバラに活動していた個人や団体の活動に共通のテーマ性（原木流送仕事唄のまちづくりへの活用など）をもたせることに寄与してきたように思われる。

組織的には、当劇場の中心メンバーは個人のもつ優れたアイデアや行動力を見込まれて、さまざまな組織の中で活躍している。しかし、実行委員会は青年会員や農協・役場職員などの寄り合い所帯であるから、イベントが終ればもとのサヤにもどる人々である。今のところ、ほべつ町民劇場を地域住民が日常的な活動を展開する上で必要な人間関係形成の受け皿にしよう、とまでは考えていないようである。

ともあれ、本研究は「町民の才能を引き出す機会を提供する」うえで重要な役割を果たしている。このことは、従来、住民参加をうたいながら、実際には一部の行政担当者をはじめとする地域リーダーの献身的努力によって支えられてきたイベント型の地域振興を見直す契機ともなる。

以下、研究成果に解説を加える。

I 土 場 唄

原木流送仕事唄のベースは、共同で作業をすすめるための「かけ声」である。その持ち味を生かすために、第10回穂別流送まつり（平成5年7月25日）では、鶴川に「土場」を新設し、山仕事とともに再現された。また、新しい地域づくりのテーマソングである「土場唄」は、鶴川で原木流送に携わった人々から採譜した仕事唄をもとに、みんなが歌えるように童歌風にアレンジしたものである。穂別高校の生徒による男性二部合唱で「土場歌」が披露された。

穂別町でまちづくり関連のイベントが催されるようになったのは、「穂別商工農産まつり」（昭和54年開始）と「穂別流送まつり」（昭和58年開始）からである。当時まつりといえば穂別神社をはじめ、開拓当初から各地に設けられた鎮守社のまつりであった。しかし、こうした神社のいくつかは、神社を維持してきた地区の過疎化が進行したことにより、まつりを行うことができなくなっていた。

そこで町商工会、町農協、町が協賛して開催したのが穂別商工農産まつりである。このまつりは宣伝パレードや徳の市などを通して、穂別の特産物を広く町内外に紹介することに主眼を置いていた。一方、穂別流送まつりは商工会青年部と農協青年部が企画したもので、原木流送を受け継ぎ、魅力あるまちづくりを進める目的であった。

しかし、この二つのまつりは、ともに8月中旬に開催されていたため、昭和60(1985)年からは流送まつりとして1本化し、新たな観光行事として発展させていくことになった。この頃穂別では、クビナガリュウをメインとする町立博物館の設置や町営キャンプ場が整備されたことにより、年々観光客が増える傾向にあった。さらに穂別ダム完成や国道274号線の開通にあわせた式典などの取り組みも迫られていた。こうした事情を背景に、昭和60(1985)年6月10日、観光協会が設置され、流送まつりが観光資源として位置づけられるようになった。また、昭和60(1985)年の流送まつりからは農協青年部、商工会青年部、カラマツ青年隊、町内各青年団体、農協、商工会、森林組合などで流送まつり実行委員会が組織され、全町レベルのイベントへと展開してきた。

II 原木流送の風景

原木流送の仕事は、次のように「藪出し」、「玉曳き」、「下曳き」（バチ曳き）、テッポーなどの作業に分かれている。

〔藪出し〕積雪を利用して、伐採された木材を、トビを使って馬の利用できる場所に集材する作業。

〔玉曳き〕タマ櫓による中間土場までの運搬作業。

〔下曳き〕ヨツ櫓・複式バチ櫓・バチバチ櫓などによる駅土場または流送河川までの運搬作業。

〔テッポー〕河川土場に搬出された木材を、春の雪しろ水の増大を待って一時に流出する作業。下流のアバ（網場・陸揚げ場）で陸揚げされた。最初は鵠川に本アバがあり、似湾（仁和）に補助アバがあったが、鉄道が敷設されてからは穂別に本アバができた。

明治30年代から40年代にかけて、北海道は製材・木工業の好況拡大期であり、パルプ・製紙資本の進出・発展期であった。明治39(1906)年には富士製紙株式会社が釧路に進出したのをはじめ、同41(1908)年には王子製紙苫小牧工場が建設されるなど、道内各地に大小の製材会社、木材会社、製紙工場、マッチ製軸工場などが続々と設立された。

鵠川原木流送は、明治42(1909)年に王子製紙苫小牧工場が国有林の払い下げを受けたのを機に開始された。占冠や鵠川オロロップ（福山）・奥穂別（長和）・中穂別（稲里）から出材・運材流送し、古くは現在の鵠川町まで流送した〔鵠川略図・参照〕。

第1次欧州大戦の影響で、ドイツに輸出されていたナラ材の貿易が途絶えたため、道内一般の木材界は停滞の傾向にあったが、穂別町の林業は、王子製紙の事業拡張に伴い年々伐木が増加した。さらに、大正期には一般用材や枕木、昭和初期には軍需用材、石炭増産に伴う杭木などの需要増加を背景に、穂別の林業は隆盛をきわめた。

薪炭製造の窯は1,000をこえ、流送陸揚げのアバは、富山県・秋田県・岩手県などから出稼ぎにやってきた職人たちが集まり宿泊飯場として栄えた。林産収量は、昭和27(1952)年に約30万石を記録し、北海道内でも有力な地域であった。流送の仕事は昭和30年代に鉄道が敷設されるまで続いた。

原木流送は森林から切り出した原木を雪解け水を利用して下流へ流す仕事であり、富山県や秋田県からおとずれた熟練した流送職人たちが、流れる丸太をトビで操りながら流れを下った。積雪と馬を利用しながら運材する方法は北海道独特のもので、地元農家の副業として定着した。

〔参考資料〕

ほべつ町民劇場が作成した『Crop ほべつ町民劇場』（1989.9～1992.7）、『Crop ほべつ町民劇場』（1992.10～1993.12）に収録されている関連記事等から、本稿で参考にした資料を掲載する。

1989.10.20「いい演劇、音楽にふれたい」北海道新聞

1989.10.20「文化の薫りもつマチを目指して」朝日新聞

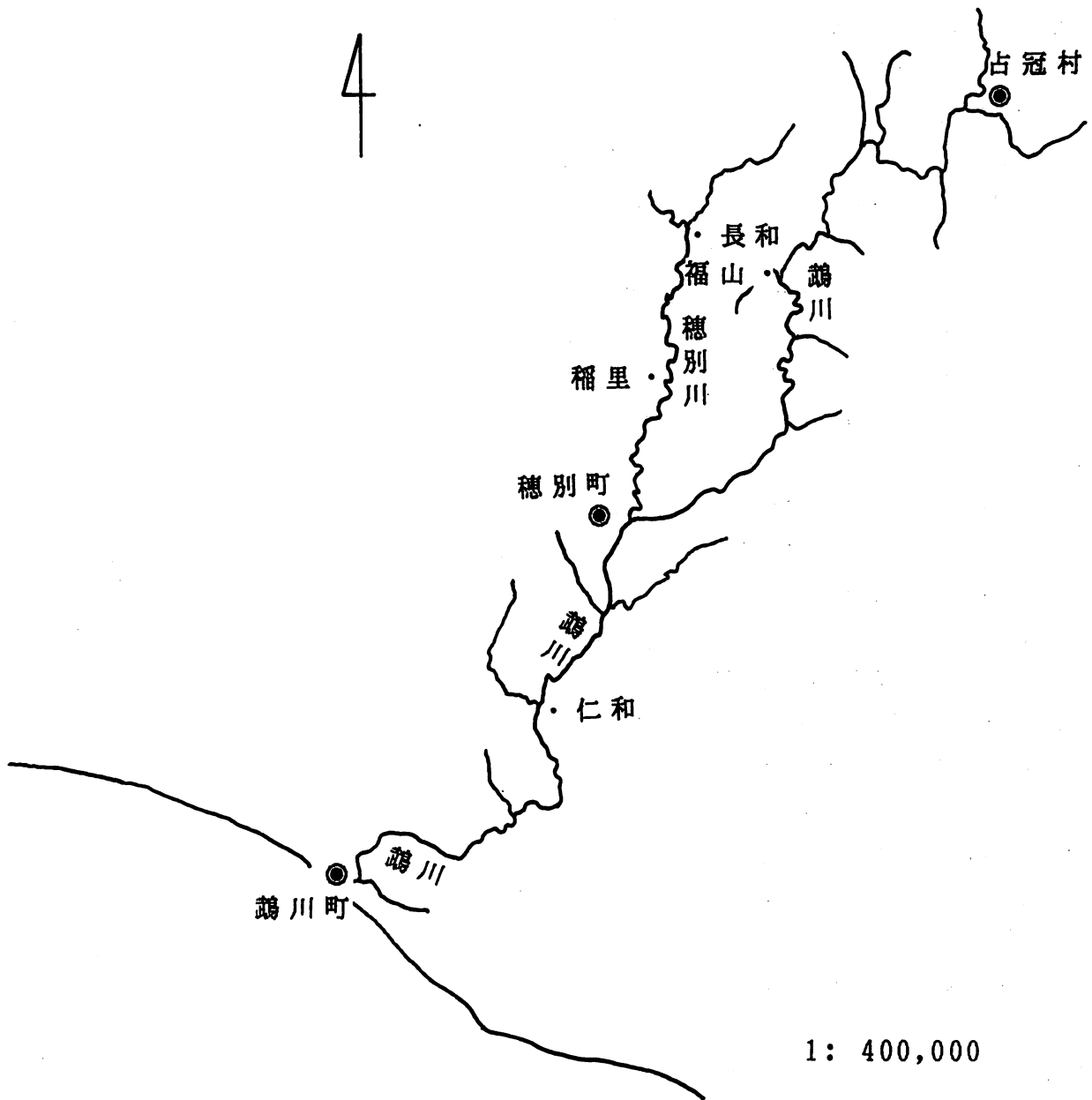
1989.10.27「基金集め来春設立」いんたびゅー 北海道新聞

1989.11.16「ムラは3・3・7拍子」苫小牧民報

1990. 1. 1 「みんなと共感できる場を」 苫小牧民報
1990. 1.19 「第9回世界ホラふき大会」 苫小牧民報
1990. 1.23 「開催認証状の伝達式」 苫小牧民報
1990. 2.23 「“山奥”からの脱皮」 万華鏡 苫小牧民報
1990. 2 「開催認定を授与」 広報はべつ
1990. 4. 2 「大ボラふきは“この私”」 苫小牧民報
1990. 4. 3 「ホラで笑って春迎えよう」 朝日新聞
1990. 6.21 「首脳会議や産業交易会」 苫小牧民報
1990. 7.20 「あすからミニ独立国サミット」 苫小牧民報
1990. 7.23 「穂別でミニ独立国サミット」 苫小牧民報
1990. 7.23 「魅力あふれる郷土つくろう」 北海道新聞
1990. 7.23 「独立国サミット開く」 室蘭民報
1990. 7.23 北斗星 読売新聞
1990. 7.24 「マリ子のまちおこし」 交差点 北海道新聞
1990. 7.25 「うしろめたさ」 夕刊時評 苫小牧民報
1990. 7.26 「北海道新時代の開拓者」 シャッター 北海道新聞
1990.10. 3 「19日、札幌コンサート」 苫小牧民報
1990.10.16 「文化は町のエネルギー」 朝日新聞
1990.10.17 「大きな人間になってほしい」 ズームアップ 苫小牧民報
1990.10.17 「文化薫るマチ推進へ」 北海タイムス
1990.10.18 「札幌と歌えるぞ！」 室蘭民報
1990.10.20 「こどものためのコンサート」 苫小牧民報
1990.10.12 「子供に生の音楽を」 自由席 北海道新聞
1991. 9.30 「国際水辺環境フォーラム穂別ステージ」 苫小牧民報
1991.10. 9 「近自然河川工法」 夕刊時評 苫小牧民報
1991.10. 2 「水辺管理、より自然に近く」 読売新聞
1991.10. 3 「国際水辺環境フォーラム穂別ステージが開幕」 町からまちへ 苫小牧民報
1991.12.18 「来月9日、地球体験館で詩と音楽の夕べ」 苫小牧民報
1992. 1. 8 「詩と音楽の夕べ」 苫小牧民報
1992. 1.11 「詩の朗読や演奏 90人の聴衆酔う」 北海道新聞
1992. 4. 4 「暑い 冷たい 大騒ぎ」 ホットライン 苫小牧民報
1992. 3.20 「サウナから川、裸でスキー」 苫小牧民報
1992. 3.29 「サウナで温め、川にドボン」 北海道新聞
1992. 6.11 「地球ステージ来月には完成」 北海タイムス
1992. 6.25 「穂別町 元気な地球展」 苫小牧民報
1992. 7. 7 「川の上に巨大舞台」 苫小牧民報
1992. 7.10 「シンポやコンサート」 北海道新聞

1992. 7.11 「親水ステージ地球コンサート」室蘭民報
1992. 7.14 「お祭りムード一色へ」北海タイムス
1992. 7.15 「人間流送競技に出ませんか」北海道新聞
1992. 7.15 「24、25日に穂別流送まつり」室蘭民報
1992. 7.18 「24、25日に流送まつり」北海タイムス
1992. 7.21 「地球は、いま テーマに」苫小牧民報
1992. 7.21 「地球 テーマに討論会や演奏会」北海道新聞
1992. 7.22 「開基80年祝賀の響き」苫小牧民報
1992.10.11 「身障者用バンガロー建設へ」北海道新聞
1992.12. 6 「まちづくり功労賞創設」北海道新聞
1992.12.24 「1頭と1人に サラウアの帽子 賞」苫小牧民報
1992.12.26 「仕事歌を記録採集」苫小牧民報
1992.12.26 「冬のキャンプ今年も」苫小牧民報
1993. 2. 1 「人気バンドは楽しい」北海道新聞
1993. 2. 5 「冬のキャンプ参加者募集」苫小牧民報
1993. 2.23 「労働歌を調査保存」北海道新聞
1993. 3. 7 「生の木やりに感動」苫小牧民報
1993. 3. 8 「雪の家づくりに挑戦」北海道新聞
1993. 3. 8 「冬でもキャンプを！」苫小牧民報
1993. 3.10 「流送唄にひかれ仕事唄を調査中」北海道新聞
1993. 5.29 「地域文化の発信地目指す」北海道新聞
1993. 7.24 「キャンプツアーが定着」北海道新聞
1993. 7.26 「まつり満開」苫小牧民報
1993. 7.26 「原木乗りや人 流送」北海道新聞
1993. 8. 1 「ザイラー夫妻が廃校コンサート」室蘭民報
1993. 8. 2 「肌寒いけど夏を満喫！」北海道新聞
1993. 8. 3 「新鮮野菜、笑顔で収穫」苫小牧民報
1993. 8. 3 「廃校コンサート 今年も道内各地で」朝日新聞
1993. 8. 7 「あす、廃校コンサート」苫小牧民報
1993. 8.17 「お久しぶりピアノの音色」苫小牧民報
1993. 「蘇る廃校」『北海道暮し』第3号 北海道
1993. 6.12 「来月からピアノコンサート」北海道新聞
1993.11.11 「穂別 あす、音楽と朗読の夕べ」苫小牧民報
1993.11.14 「長見さんの記念碑建立へ」北海道新聞

鵠川略図



ほべつ町民劇場
原木流送仕事唄の調査と新しい継承について

I 土 場 唄

II 原木流送の風景

I 土 場 唄

作詞・齊 藤 征 義（北海道詩人協会会員）

作曲・佐々木 政 俊（元穂別富内小学校教諭）

山の奥は ふぶきだ	ヨイトコショデ
ふぶきがー なんじゃいな	ヨイトコショード
あー 雪のー しぶきだ	ヨイトコショード
きーばなを 立てろ	ヨイトコショード
あ うんまいことーやれよと	ヨイトコショード
つづみぐさの はらっぱだ	ヨイトコショード
走る水ー ぬーるむぞ	ヨイトコショード
桜散る散る 網場が近いぞ	網場が近いぞ もうすぐだ
もうすぐだ	もうすぐ
もうすぐ もうすぐ	もうすぐ もうすぐ
まつりも近いぞ	まつりも近いぞ
ヨイトコショード	
さんべいのよつやだ	ごんべいのりくぞうだ
八百屋のやぞうは	八百屋のやぞうは
かながわしゃくまる	かながわしゃくまる
さんべいのよつやだ	ごんべいにりくぞうだ
八百屋のやぞうは	八百屋のやぞうは
かながわしゃくまるだ	かながわしゃくまるだ

〔は手のひらで
おさえる

土 場 唄 H5. 6. 5

The musical score is written in 4/4 time with a key signature of two flats (Bb and Eb). It consists of several systems of staves. The first system shows the beginning of the piece with a treble clef and a key signature change to two flats. The second system continues the melody and accompaniment. The third system introduces the vocal line with the lyrics: "や 手のひら <は ぶぶき ぐあ". The fourth system continues the vocal line with the lyrics: "い トコ ショ テ". The fifth system continues the vocal line with the lyrics: "ぶぶき が - はんしゅう な あ - ゆき の -". The sixth system continues the vocal line with the lyrics: "い トコ ショ - グ". The seventh system continues the piano accompaniment. The eighth system continues the piano accompaniment.

しぶき た" きーは" せを たて ろ
 王イ トコ ショー テ" 王イ トコ
 あ 込 ま 11 ニ と - や れ 子 七 フグみぐさの
 ショー 9" 王イ トコ ショー --- テ"
 はら、はつた" はしり みす" - ぬ - 子 心 ぞ
 王イ トコ ショー --- 9" 王イ トコ

さくら ちるちる あぼか ちかいぞ もうすぐだ" もうすぐ

ソ - テ" あぼか ちかいぞ もうすぐだ" もうすぐだ"

Handwritten musical notation for piano accompaniment, including chords and melodic lines.

もうすぐ" もうすぐ" まつりお ちかい ぞ 三 ト 三 一 三

もうすぐ" もうすぐ" まつりお ちかい ぞ 2度目の分 Fine

Handwritten musical notation for piano accompaniment, including chords and melodic lines, ending with "Fine".

Handwritten musical notation for piano accompaniment, including chords and melodic lines.

Handwritten musical notation for piano accompaniment, including chords and melodic lines.

Handwritten musical notation for piano accompaniment, including chords and melodic lines.

Allegro

Musical staff 1: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a whole rest.

Musical staff 2: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a whole rest.

Musical staff 3: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line starting with a half note, followed by eighth notes. A double bar line is present. The word "Allegro" is written above the staff. Below the staff, there is a circled "8" with a bracket.

Musical staff 4: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line with lyrics: "心 心の かつ やん" and "やおやの やんは かながわ しくま子".

Musical staff 5: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line with lyrics: "心 心に いくどた" and "やおやの やんは かながわ しくま子".

Musical staff 6: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line with lyrics: "心 心に いくどた" and "やおやの やんは かながわ しくま子".

Musical staff 7: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line with lyrics: "心 心の かつ やん" and "やおやの やんは かながわ しくま子".

Musical staff 8: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line with lyrics: "心 心に いくどた" and "やおやの やんは かながわ しくま子".

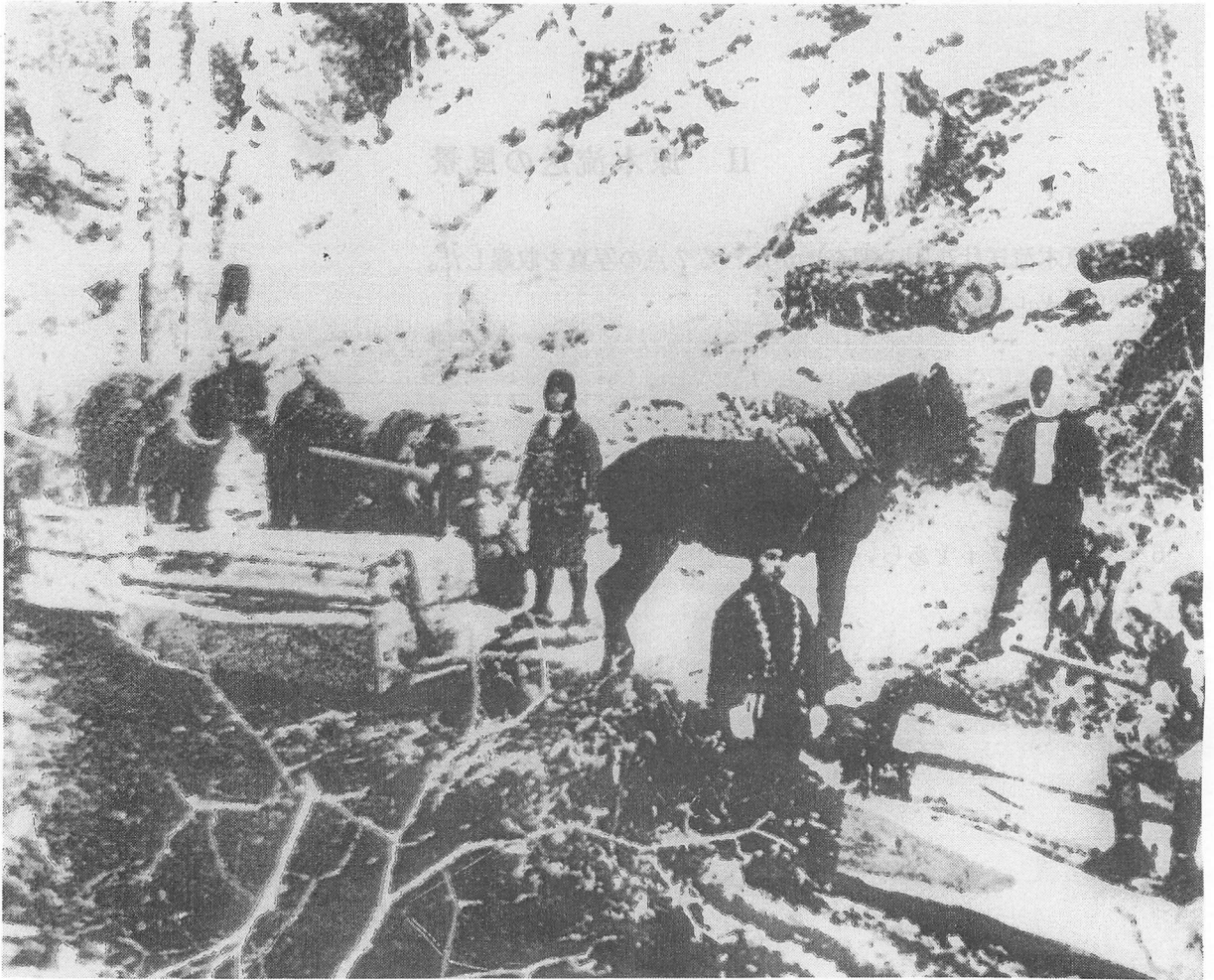
Musical staff 9: Treble clef, key signature of two flats, 4/4 time signature. Contains a melodic line with lyrics: "心 心に いくどた" and "やおやの やんは かながわ しくま子".

II 原木流送の風景

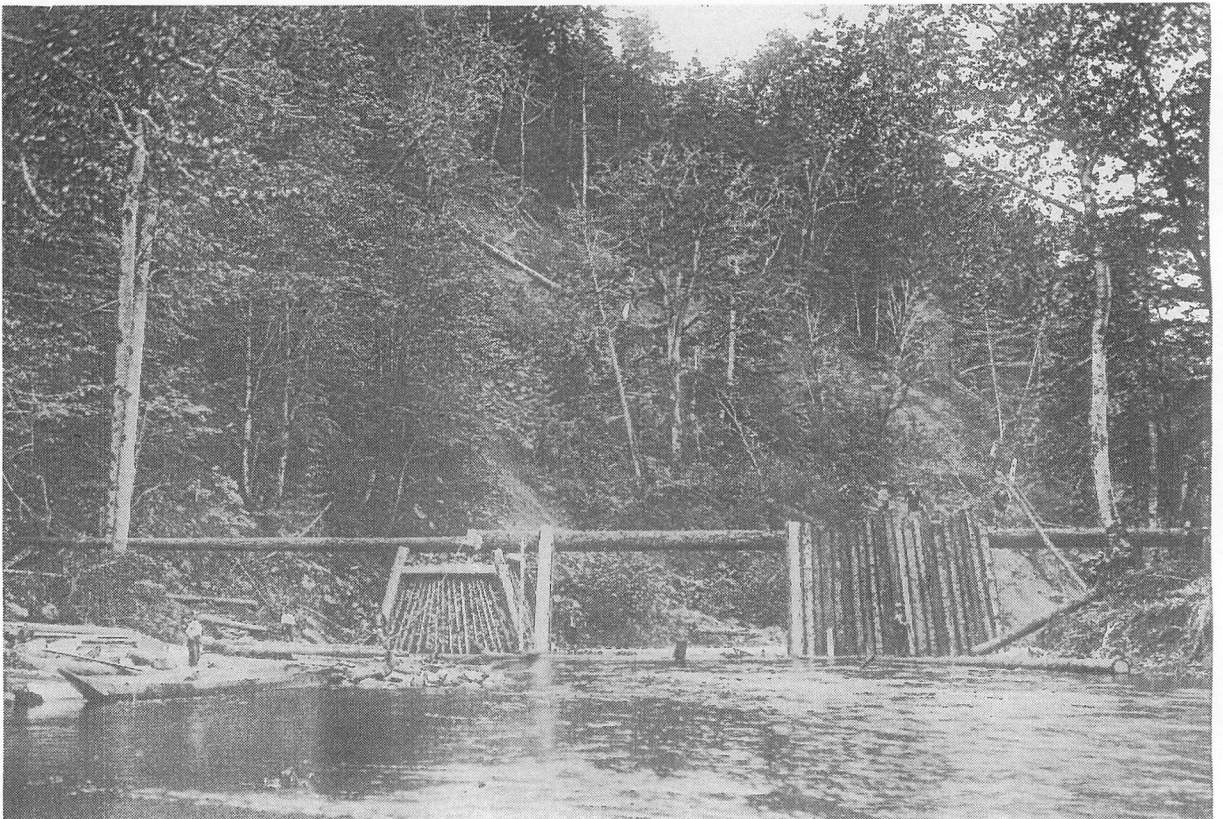
以下に原木流送仕事唄の調査にかかわる7点の写真を収録した。

- 1 山元水止め解除
- 2 流送
- 3 流送木寄せ
- 4 網場土場
- 5 土場
- 6 女総出のワイヤあらい
- 7 原木流送

(原木搬出 ヤブ出し)



(山元 水止め)



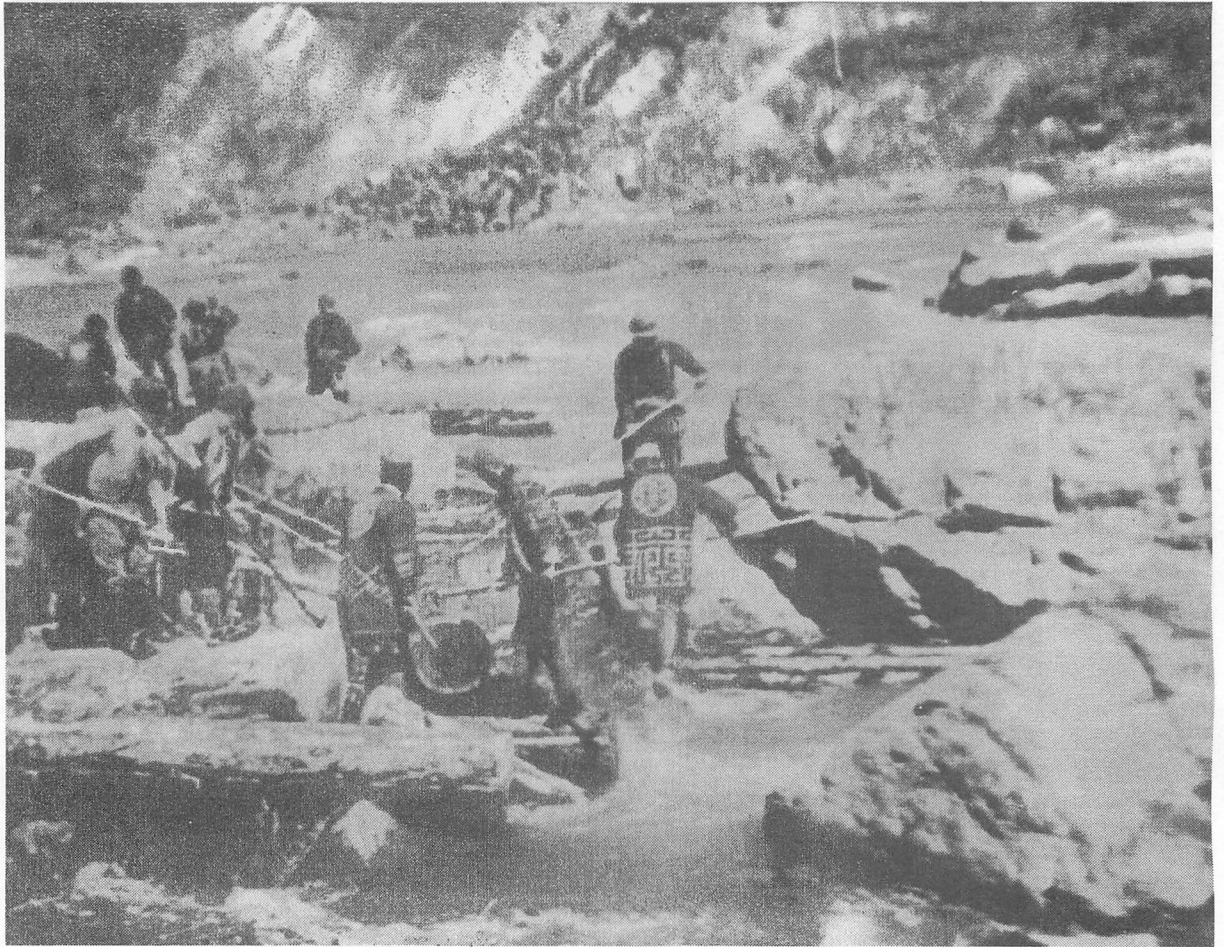
(甘寄木製紙)

(山元 水止め解除)



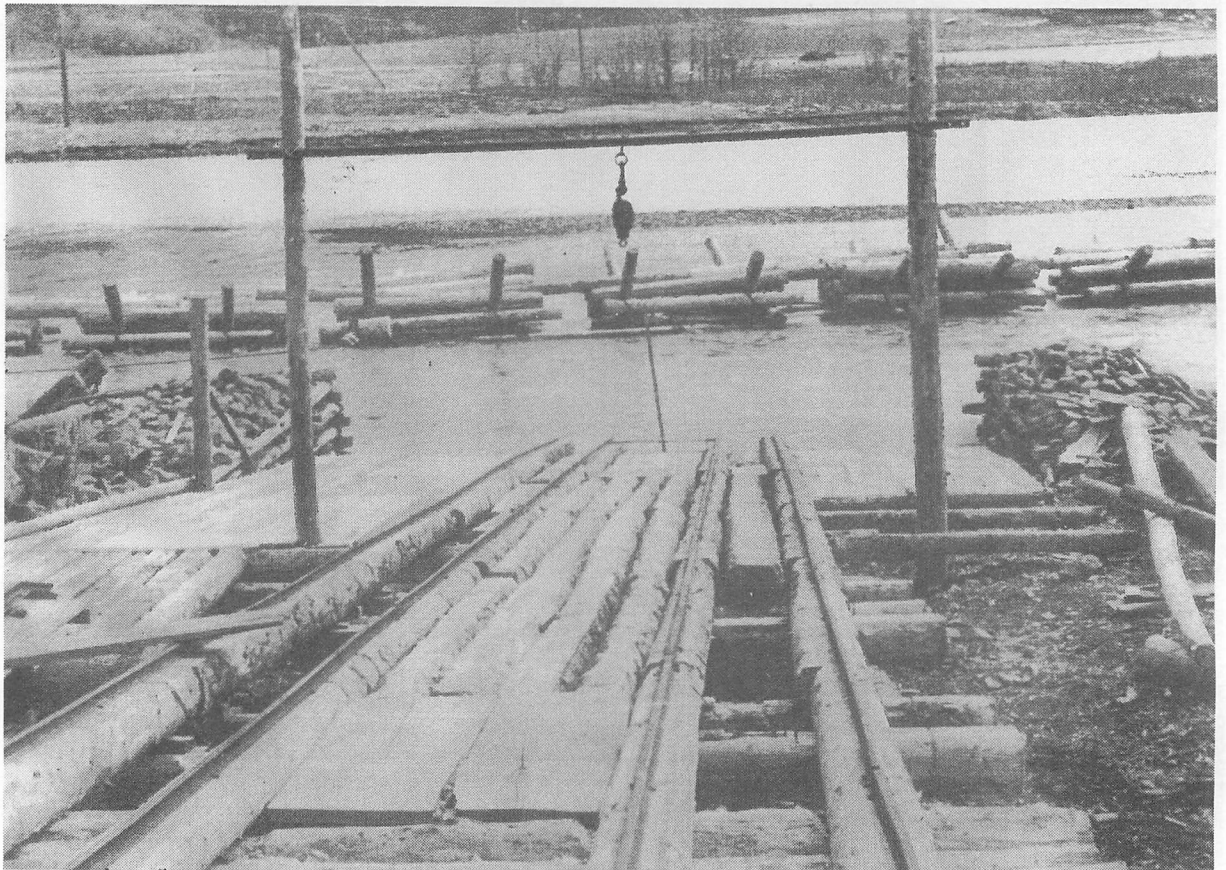
(流送)



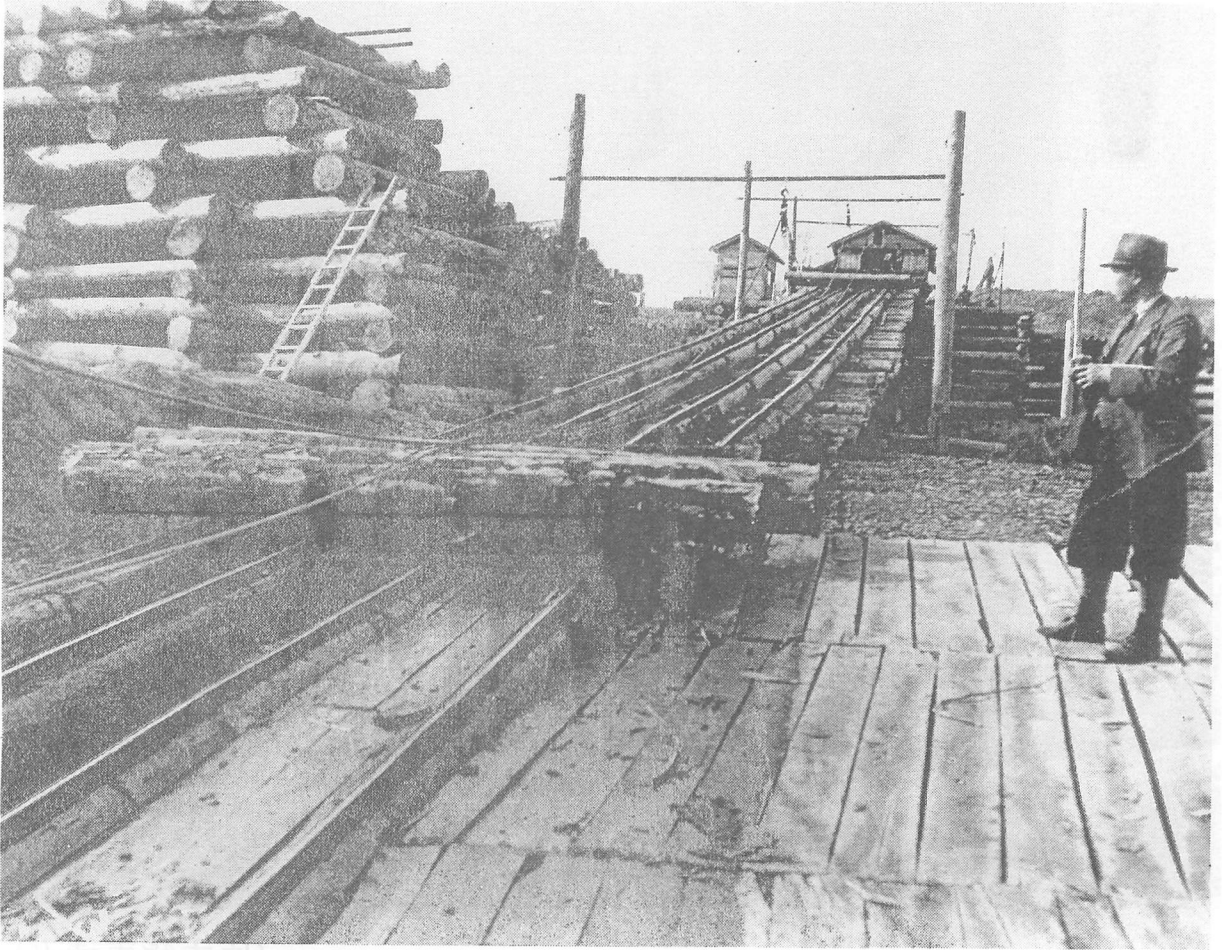


(水)

(場土網)

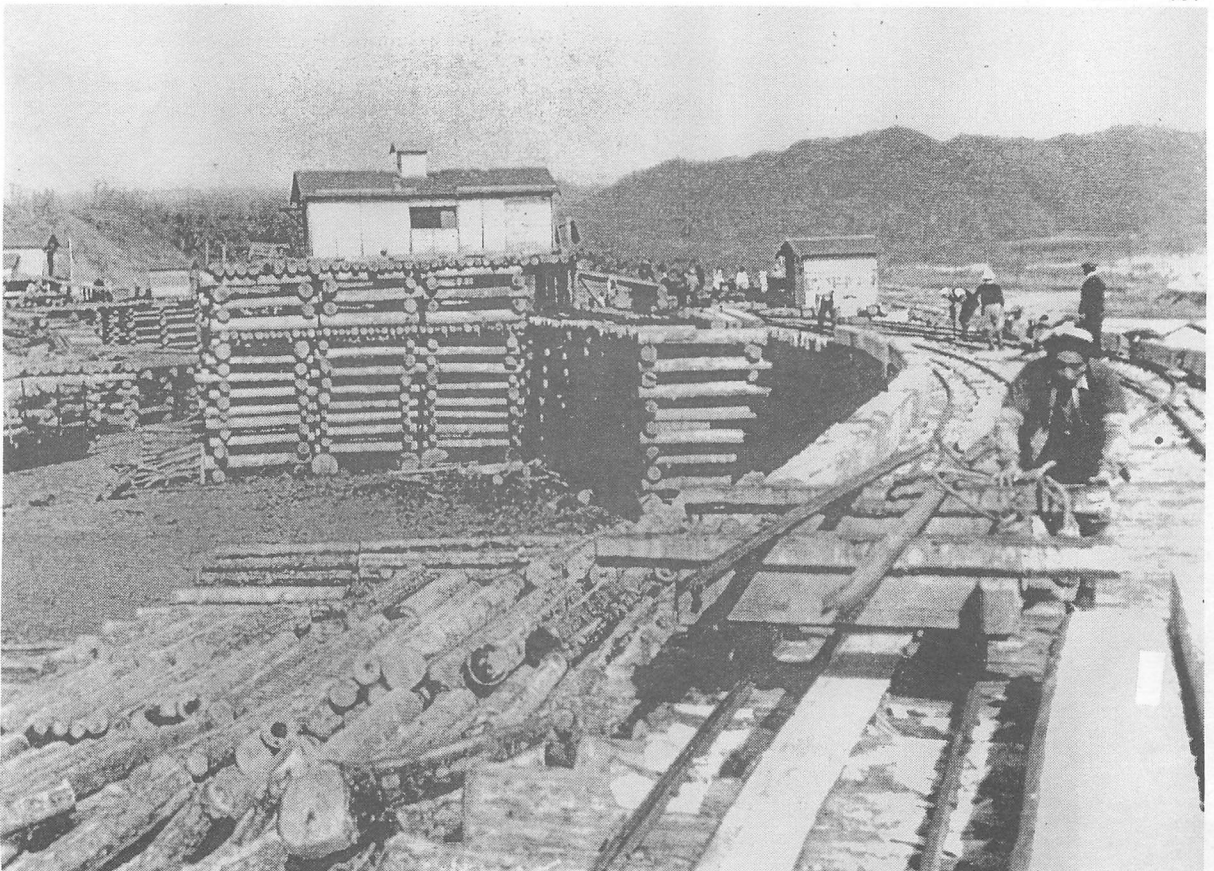


(土場)



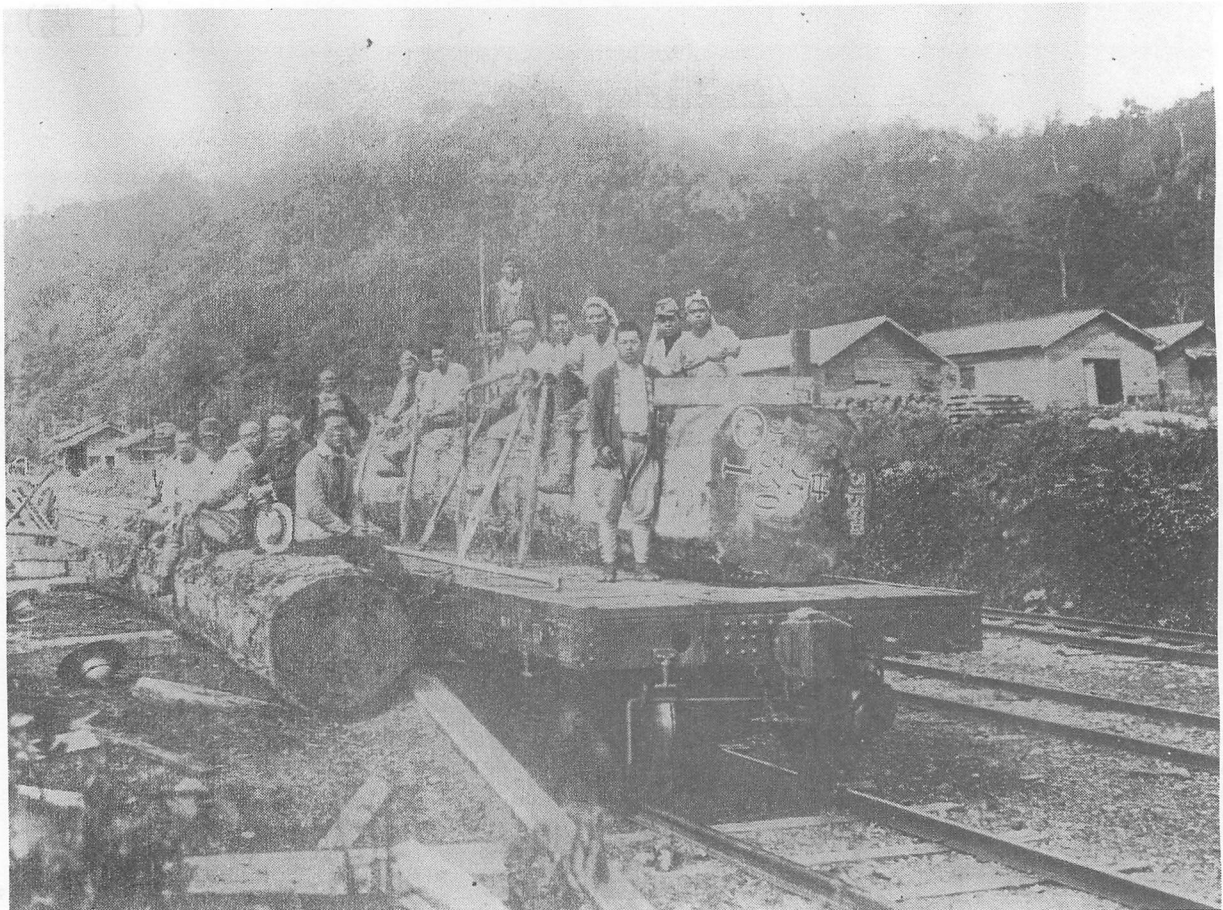
(別木買車対)

(土場)





(原木貨車積み)



A Study of a Song For Sending Drift Timbers Down to Towns and Its New Succession to
Community People, Reported By Hobetu Townspeople, and Noted By Masato MORI,
REC TECHNICAL REPORT, No.0008 [SS360] Feb, 1994, HOKKAIDO RESEARCH CENTER
OF ENVIRONMENT AND CULTURE,
SEISHU GAKUEN, SAPPORO 004 JAPAN.

○執筆者紹介

(報告書)

ほべつ町民劇場

代表：中澤 由幸 (なかざわ よしゆき)

北海道穂別町のまちおこしグループを集め、1989年秋
から活動開始。流送まつりを中心に交流型イベントに
より運動を展開中。

(解説)

森 雅人 (もり まさと)

北海道環境文化研究センター主任研究員
静修女子大学講師

平成6年2月1日 発行

編集：北海道環境文化研究センター

発行：(学)静修学園 和野内 崇弘

〒004 札幌市豊平区清田4-1-4-1 ☎(011)881-8844
